



今日塗るのと、明日塗るのでは仕上がりが違うというほど気温、湿度の微妙な変化に影響を受ける。自然をどう読むかの勝負でもある

ものが残る方がもっと恥ずかしい」

土を落ち着かせるため、長くて7、8年ほど寝かせる。できた壁は100年、200年と残る。そうした年月からすれば、瞬間といえる時間ですべてが決まる。そんな厳しい勝負に挑む職人の名はいつか忘れられても、塗り込まれたプライドは朽ちることがない。

久住さんらが受け継ぐ左官の技は宮大工の技能などとともに「伝統建築工匠の技」として、2020年、国連教育科学文化機関(ユネスコ)による無形文化遺産への登録が決まった。

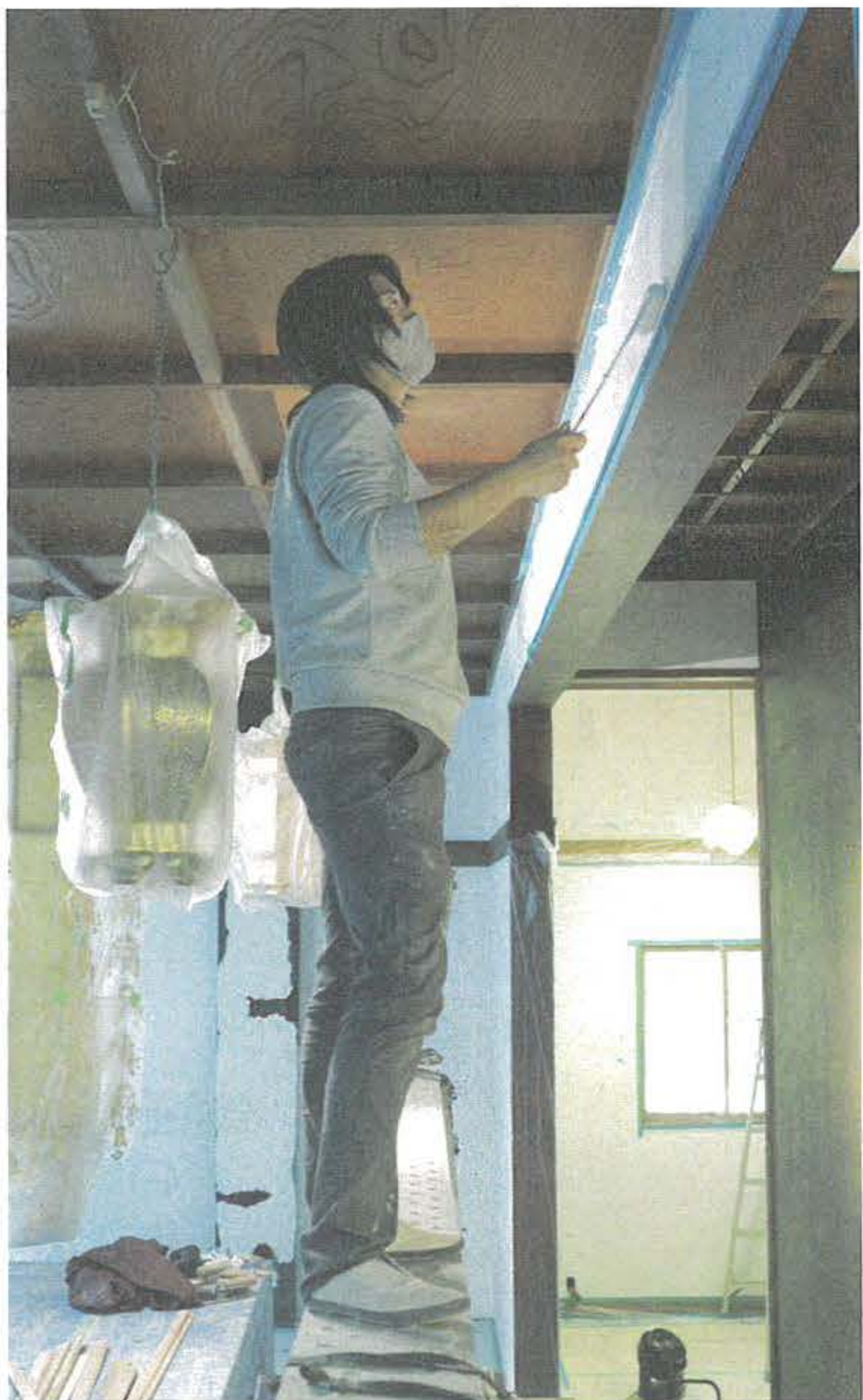
その技術は人の手から手へと伝えていくほかないが、壁といえば出来合いのボードにクロス張り、という施工が増え、左官職人も減っているという。

だが、業界も手をこまぬいてはいない。日本左官業組合連合会(東京・新宿)は全国でまちまちだった素材や施工に統一的な基準を設け「誰でも頼みやすい左官」をアピールする。同連合会の鈴木光理事・技術顧問によると、追い風も吹いてきた。国連が打ち出す持続可能な開発目標「SDGs」だ。

左官が扱う材料は土や石灰石、藁など自然素材が中心で、いずれ自然に戻る。漆喰は大気中の二酸化炭素と結びついて固まる。「漆喰を使えば、おのずとSDGsにかなう」(鈴木氏)という。

業界の将来は暗くない、と思える光景に出合った。一行院(東京・文京)という寺の改修現場。左官になって2年半という酒寄悠里香さんが、足場の上で黙々と作業をしていた。土で遊び、石を集めるのが好きだった酒寄さんにとって、左官は天職のようだ。「職人さんは無口で、見て盗め、という感じかと思ったら、先輩がみんなやさしくて、なんでも教えてくれる」と話す。

社員として勤務するあじま左官工芸(東京・葛飾)は休暇制度など、時代に応じた労働環境を整備する。昔、新入りは漆喰を練るだけで、3年は鏝を持たせてもらえなかったというが「それでは若い人が定着しない」(阿嶋一浩社長)と、古いしきたりはなくした。業界の持続可能性を賭けた取り組みだ。時とともに成長する久住さんの壁同様、業界も風合いを変えながら続いていく。



「薄塗りだけでできてよだめ、厚塗りだけでもだめ。

両方できるようならなくては」と課題を口にしながらも、

酒寄さんは天職に就いた充実感を漂わせる(東京都文京区の一行情)

# 時間を操り 土や水の声を聞く

砂を混ぜた土をなでるジャリジャリという音すら、心地いい。無駄がなく、角が立たない鏝の行き来に引き込まれ、気づけば立ち現れる壁の層……。

内外の公共建築、商業施設から私邸まで、自在の空間を演出する壁の魔術師、久住有生さん(50)の動きそのものがアートだった。

左官の命、鏝をみせてもらう。「ここがへこんでいるのが、わかりますか」。先の方に硬貨大のくぼみがある。言われないと気づかないほどのへこみだ。漆喰や土というやや武骨な素材を扱う道具に、これほどの繊細さが求められるとは。工法や素材、下地から仕上げまで段階に応じ、大きさや形、硬さなどを変えた鏝はゆうに千丁を越す。つまり、手の技は無限、ということだ。

生まれる壁はさらさらと流れる風を映しとったり、月日がたち宇宙空間を思わせる漆黒に変化したり。竹中大工道具館(神戸市)に納められた壁はしましまの幾何学模様ながら「水平のラインが多少波をうち、影のでき方が違うので、全体が柔らかい印象」と西村章館長はいう。手仕事ならではの味わいだ。趣向に富む壁は見つめて語りかければ、話し相手になってくれる。それでいて普段はつましく、建物を支え、空間を仕切る役目に徹している。

父の久住章氏は素材から工法まで一から見直し、業界を一新したレジェンドだ。左官ほど面白い仕事はないと信じる父に、久住さんは早くから鏝を握らされ、練習が終わらないと、ご飯を食べさせてもらえなかった。父の土産は鏝。こんな友達を持っていないだろう、といわれても「うれしくなかった」。

高三のときの父の勧めによる欧州遍歴が転機となった。スペインでアントニオ・ガウディのサグラダ・ファミリアと出合っ、はっとした。無愛想な石を積み重ねた構造物が、なぜ人の心を打つか。左官もいいなと思えたという。



壁はあくまで脇役、という久住さん。「なんかわからないけれど気持ちいい、落ち着く、幸せな気分になれる、というのがいいですね」

塗り方などを変え、微妙な風合いの違いをみるためにつくってきたサンプルの棚。膨大な手間ひまが、一面の壁にかけられる(兵庫県淡路島の久住さんのアトリエ)



久住さんの強みは時間を制御できることらしい。塗った途端、土は乾いていくが、本来1日で固まる素材を、材料の調合などの工夫で、1週間にも延ばせるという。何十、何百平方メートルの巨大空間を手掛けられるのはそのおかげだ。とはいえ、のんびりとはやってられない。いったん始めたなら、下地でも仕上げでも、同じ面は一気に仕上げる。間をおくと、場所ごとに乾き具合が異なり、違った壁になるからだ。

新しい壁を手掛ける際はサンプルを作る。1枚に10日かかることもある。そのサンプルが、ある私邸のためのものだけで、普通の家屋の壁にして2軒分の面積になった。そこまで周到に準備しても、生き物である土と水の動きは読み切れない。構想外のものになったら、はがしてやり直す。

「現場でのやり直しはプロとして恥ずかしいようだけれど、納得いかない